

# ほなひ歴史通信

第59号  
2011.6.1

森のおはなし会『大子の民話』を出版  
〜未来の子供たちに形として残すために〜

森のおはなし会は、平成六年四月公民館の読み聞かせ講座「終了後、受講者を母体にして、平成十二年四月「森のおはなし会」を設立し、現在に至っている。現在のメンバーは、入退はあったが二十名である。

会の運営方針は、「奉仕の精神を忘れずに」「見る側も演じる側も楽しい会にしよう」の二つである。この方針をモットーにして、物語や大子の民話などの「読み聞かせ」活動を献身的に展開している。町が「家読」を推進しているのでその補完的な役割を果たしている。

## 大子の民話



### 森のおはなし会

昨年九月には、文献（石井良一著『大子の伝説』）をもとに、会員たちが分かりやすく再構成して読み聞かせをしてきた「大子の民話」を出版した。出版の理由を森のおはなし会は、「昔話は永い歴史の中で人々に引きつがれてきまし

た。大子町には、面白い話・心を打つ話・悲しい話など、その土地にまつわる話しがたくさんあります。私たちは、昔話が大子町内に教多くあることを知り、未来の子供たちに形として残そうと考え、分かりやすい文章にしました。そして、その文章をもとに菊池英男氏に絵を添えて頂き、紙芝居にして小学校のあさどく（朗読）や老人会の集まりなどで読み聞かせを行ってきました。それらをもとに出版する事になりました」と述べている。

かつて「いろり端」や「夜なべ仕事」のあいまなどに語られてきたふるさとの昔話（伝説、民話）が、忘れ去られようとしている。ふるさとの昔話が語られなくなったのは、家庭から「いろり端」がなくなっただけではない。その背景には、鮮やかな映像文化の普及がある。その上、昔と異なり、通婚圏が拡大し、核家族の増加にともない、ふるさとの昔話が祖父母や両親から伝え聞く機会が失われたからである。

現代の社会生活における家庭は、「いろり端」がなくなつたが、親が物心がついた子どもに語る場は、「子供を寝かせ付ける時」くらいかも知れない。そこで語られるのは、それは、大人が子供の頃保育園や幼稚園で、紙芝居などを通して読み聞かされてきた「むかし、むかしあるところ」で始まる「日本のおとぎ話」といわれる「桃太郎」「花咲爺」「舌切雀」「一寸法師」などといった類いの絵本の読み聞かせである。かつて、ふるさとの民話などは語られないといわれている。

森のおはなし会が出版した『大子の民話』には、私達の祖先がきびしい仕事に携わりながら語り継いできた町内各地の民話が十編取り上げられている。もともと語り継がれ、伝承されてきたものであるから、それほど長いものではない。短編の物語であり、小さい子供にもあきさせずに最後まで読み聞かせできる内容であり、小学校高学年は、自分で読み取れるよう文章にルビが添えてある。「家読」を推進して行くにあたり、家族で読んでほしい本である。

（小澤）

## 『生きた証・私の抑留記』(四)

全国強制抑留者協会茨城県支部長

須藤 富之助

ハリコフ駅を出発してから二日後の九月七日午前十一時頃、アルチョモスク駅に到着した。駅から歩いて収容所に向かった。我々は帰国を期待しながら、早くも第四番目の収容所生活となつた。その生活は掠奪に始まり重労働の日々であつた。

### ○四番目・「アルチョモスク収容所生活」

収容所は赤煉瓦造りの四階建てのものであるが、東部戦線で独軍に爆撃された残骸の中で、比較的傷んでいないものが利用されていた。構内には我々の同胞が大勢いたので、いろいろな環境情報が欲しかったが、ソ連兵の監視の目が不気味でどうすることもできなかった。しばらく待たされた後、自分たち三十余名は、病人(自分は疥せん病がひどかったため)として隊から離され、収容所門の入口に整列をした。装具検査が始められ、嫌な思いが走つた。何度同じような検査が行われたであろうか。その度自分の持ち物が巻き上げられてきた。

今度は、襦袢、袴下、冬套衣外被、天幕、その他の私物、靴下、手袋、四合ほど持っていた命の綱・生米などすべて巻き上げられた。なんと執念深い奴らであろう。これが露助(ソ連兵の蔑称)の正体であつた。入所者の総てについて検査が終わつたのは夜の九時過ぎであつた。

翌朝、作業の準備が騒々しく始まつていた。ソ連は共産党国家だけに「働かざる者は食うべからず」の主義が徹底していた。長い旅疲れ、心身ともに困憊の極に達している我々に対し、さつそく本格的な強制労働が待つていた。石山作業である。ローム十鍬、金矢ハンマーを手にして、毎日、毎日石山へ送り込まれた。ノルマが強要され苛酷な重労働が強いられた。

九月の末ともなると、ウクライナ地方は寒気が増し、初冬を感じさせる時期となり、石山作業の現場で夜の九時、十時頃まで迎えの自動車を待つ身の辛さは、今なお思い悲しむのである。

三〇〇名からの人員をトラック二、三台で、二十五名くらいずつ輸送するのであるから、最後の頃になると収容所に帰つて食事をとるのは夜の十時頃になり、真つ暗なところで食事をとることもあつた。

月一回くらいのわりで身体検査が行われるのであるが、自分は重労働作業から軽作業現場へ配置換えになり、針工場、硝子工場、煉瓦工場と、約二ヶ月くらい従事した。しかし、今度の検査で二種の体格等位となり、粘土山の作業場に向けられた。ここでの現場は、作業能率に重点が置かれ、作業能率が上がらないものは、ラーゲル(収容所の監視)へ通報され、帰つてから説諭されるから、誰もが頑張つて作業に従事せざるを得なかつたので体力の消耗が甚だしかつた。

昭和二十二年六月始めの頃、当地区の将校を残して収容所の一隊がハリコフ地区に移動した。自分も一員として移動部隊に入つたので同胞と名残を惜しんで別れた。

### ○五番目・「ハリコフ収容所」

どこへ? 行つた収容所は、ウクライナの首都キエフの東、第二の都市ハリコフにある「ハリコフ収容所」であつた。そこは、製菓会社の破壊された跡である。ここの収容所で二ヶ月近く作業にあつた。ここでの作業は、収容所内の仕事であつたが、一番困つたことは、南京虫と蚤の攻撃である。毎夜二、三回、多いときは四、五回電灯の下で毛布を広げて蚤退治をやるわけだから、到底眠れぬはずがなかつた。

また、移動があつた。「エンジン」というところである。生活リズムも不足ながらできてきたのに、嫌な思いで収容所を後にした。

## ○六番目・「エンジン収容所生活」

「エンジン収容所」にきてみると、ここには「アルチイモスク」にいた知人も大分元気な姿でいて、お互いに健在を喜び合った。収容所での作業は、朝出、昼出、夜出の現場三交代制の道路作業の橋架である。一番つらかったのは夜間の十時から朝の五時までの作業で、ミキサで練り合わせた生コンを型枠の中へ入れる作業であった。型枠がかなり高い位置にあるので、急傾斜の板橋を渡って行くので途中で転倒する時があった。

十一月に入ると、森林伐採作業に移動させられ、山の宿舎生活に入った。寒空の夜間は、防寒外套では到底まにあわなかったけれど、若さと精神力で助かったと思っている。

我々は、常に何処の収容所に移動されても考えていることは、内地帰還と食べたいということだけである。収容所から森林伐採現場まで数キロあったが、その途中にコロホーズ（農業協同組合の広大な農場）があった。そこは作物が豊富にあり、隊伍から二、三名が離れ、監視の目を盗んで馬鈴薯、南瓜、玉蜀黍などを確保し、宿舎に帰ってから夜中に炊飯をして分配した。そういう生活はいつまでも続かなかつた。玉蜀黍の食べ殻がソ連兵士の目にとまり、食糧の確保は厳しくなってしまった。森林作業も打ち切られ、現場の宿舎から再び収容所にもどった。十二月半ば過ぎになった。来春こそは内地帰還が実現するだろうという夢を抱いたのもつかの間、二十六日、また、移動の命令が出た。五〇名の隊は「クリウコフ収容所」へ向かうことになった。

## ○七番目・「クリウコフ収容所」

いよいよ五日目に目的地に到着した。驚いたことには、栄養失調に近いやせ衰えた半病人的な同僚が一五〇名いたのである。この収容所の指導権をもっていた者は一兵隊で、隊長と自ら称して実権を握っていた。我々は不安と不秩序の現実に啞然

としたのである。

クリウコフ収容所での作業は、石堀作業とその採掘した石を貨車に詰め込む作業であったから重労働であった。無事帰還を考えると重労働には耐えねばならないが、この収容所での問題は、糧秣である。この収容所は分所的なものだったから、食糧の糧秣は約一カ月分くらいまとめて、本部から受け取ってくるのである。それをその途中において、横流しをしていた。さらに収容所に到着をした物をソ連の兵隊と収容所の隊長が妥協して悪巧みをするのであるからどうにもならず、この収容所の生活が死の苦しみであった。収容所生活が余りにも苦しかったから、逃げ出す者もあり、数日後に捕まって連行され、みんなの前で見せしめと称して徹底的に痛めつけられたのである。隊長だからといってこれが同胞の為せる仕打ちかと、憤りは頂点に達したのである。

ソ連兵と隊長の癒着などが長い中、苦しいハードな労働を耐え続けている収容所内の雰囲気の問題が表面化した。ソ連の将校（上級）にも分かってきたのである。おそらく自分たちと同じに行動をしてきたロシア語を話せる大西という中尉が、密かに実情を訴えたのではないかと思われた。ソ連関係者の兵隊の更迭、さらに収容所幹部でソ連の収容所の幹部と巧くやっていた本部の隊長、副官、幹部たちが転出させられた。これにより、収容所の雰囲気は明るくなった。みんなが本心に喜んで明るい雰囲気になってきた頃何となくよい予感がしてきた。移動命令が出たのである。「さて、今度は何処だろう？」。しかし、もう、何処でもいい。今までのような生き地獄はおそらく最低だろうからという気分であったのである。それが何とこの移動地が内地帰還の出発点となったハリコフ市外の収容所であったのである。今度こそは、何となく真実性のある情報に感じたので、乗車でできるよう準備万端整えて待機をしていた。昭和二十三年十月一日、ついに待ちに待った乗車命令が下りた。いよいよ内地帰還への出発である。

「大子弁になじんで」

大子町立袋田小学校長

野内 恵子

「つつぺえらないようにね。」

「のまんねえようにな。」

「つんのまんねえようにな。」

「おっこちなな。」

これは、学校行事「田植え」のとき、小学校の子ども達、保護者、教師、そして老人会の方々など、いろいろな年代の人達の口から、誰とはなしについて出た言葉である。子ども達にその言葉の意味が正確に伝わっていたかどうかは分からないが、しかし、この言葉を聞いているだけで、とても和やかに和気あいあいやっている様子が伝わってくる。

また、ある時、脱穀を行う開会行事で、「のがつぽくならないように楽しくやりましょう。」

と言った時の子ども達の顔、ほとんどの子が「何？」という感じでキョトンとしていた。実は、ほとんどの子が「のがつぽい？」の意味がわからなかったのである。方言には、今も子ども達に通じる言葉と今では全く通じない言葉とがある。しかし、一度聞いた方言は、その地方で生活している子ども達や人々にはすぐに受け入れられ、身体になじむような気がする。それだけ方言とは、ふるさとの一部であり、文化であるといえる。

私が結婚した当時、水戸育ちの夫に「お風呂のお湯、のべて入ってね。」と言った時も、「何？」という反応でキョトンとしていた。また、「起きむくれに行こう。」とか「手わすらする。」「さくいね。」なども遠い国の言葉のように聞こえたらしい。しかし、大子に住んで三十五年、夫もすっかり大子弁になじんでいる。生活環境とは「なんとすばらしきかな。」である。

さらに、教えていた子ども達に、「ゴミ箱しゃらしてね。」とか、「めなしがきれてひどいね。いたくないの。」とか、「この水、ひゃっこいね。」とか言ってしまった、別世界の住人に思われたことも数え切れないほどあった。私にとっては、日常的に使っている言葉であるのだが。

また、職員室でも「色がそじて使えないかな。」「それかっぼつといて。」「花壇をちよつくらやつちやうべ。」「こどつこいからおいしいお茶だよ。」等々、私でも初めて聞く言葉がよく出てくる。方言なのか、標準語なのか分からなくなることもある。しかし、職員室で方言が出始めると、その場の空気が和やかになり、人と人の間の垣根が取り払われる感じがする。

NHK大河ドラマ「篤姫」の中の天璋院の言葉に「ふるさとの思い出というのは宝物。心はずませ、心を静め、時には、心を慰めてくれる。」とあつたが、まさに方言とは、ふるさとの思い出もある。

方言とは、辞書によると、「その地方だけの言葉」とでているが、私の中での解釈は、単にその地方の言葉だけで言いやすいというだけではなく、その地方で暮らす人々の生活ぶりや、心の温かさなどまで含まれた深い言葉とでもいえるだろうか。例えば「今日はぬくいね。」は暖かいという意味に近いと思うが、この地方とこの季節に、実にびつたりの言葉であるように感じる。また、「おぼんがたです。」も同じである。「こんにちは」でもなく、「こんばんは」でもない夕方に、そして、その地方に暮らす人々に実にびつたりあう言葉である。

方言は、言葉を発している人の温もりや人間性が伝わってくるとともに、ふるさとのよさが肌に感（体感）じられる言葉である。これからも、郷土で使われてきた方言を折に触れて使うことで、ふるさとの良さを伝えたいとも思うこの頃である。

## ふるさと散策ハイキング

大子町文化財委員 高林隆次郎

私の住んでいる地区の西方に、標高三〇〇㊦に位置する箕輪集落がある。私はこの地の四季折々の美しい変化に惹かれ、箕輪集落への散策を兼ねてハイキングを実施した。

平成二十二年四月一〇日、袋田駅前を午前九時に出発し、南田気橋を渡ると、左側に「南田気（箕輪）観光案内板」が立っている。ここで、行く先々のメモをとる。

南田気の集落を過ぎると、町道は緩やかな上り坂へと差しかかる。あたりは小鳥のさえずりさえもない静けさの中を行くとほどなくして右側へ上がる道があり、その先に民家がある。下箕輪である。私は左側の町道へと足をすずめる。傾斜の厳しくなる道をしばらく進むと、左カーブの右土手下に赤い帽子をかぶった「いぼ地蔵」と「如意輪観音」がある。身体にいぼができたときは、このお地藏様にお参りすると治ると信じられている如意輪観音は、人生の迷いや苦しみを救い、利益を与える観音である。

この坂道で目についたのがNTTの携帯電話塔、さらに進んでいくと道の右側に一軒の民家がある。標高約三〇〇㊦に位置する上箕輪集落である。民家の入口左下の窪みから多量の水が湧き出ている。この湧水は「秀名水」と呼ばれ、徳川光圀公が大子地方巡村の折に立ち寄り、命名したと伝えられている。水は常に一定量の湧水があるため、あるそば屋の店主は、この湧水を「そば打ちの水」に使用している。

駅を出発してから時刻は一〇時二〇分、小休止をする。因みに、現在上下箕輪地区に住んでいるのは、各々二世帯、計四世帯。なお袋田駅からこの地までは、約三kmくらいである。

標高三〇〇㊦にある集落の地形は、左右の山と山に囲まれ、真ん中が窪んでおり、まさに農作業で使用する農具の「簞」を感じさせる形態をなしており、冬は暖かく、夏は涼しいという

環境に恵まれた集落である。柚の大木が畑の大半を占めているのが印象的であった。さらに進んでいくと、上箕輪で一番高い標高約三八〇㊦の所に二つ目の鉄塔、高さ四〇㊦の携帯電話用モノポール塔が立っている。

さて、歩いてきた道は、ここまでが町道で駅から約三・三km、全線が舗装道。ここから先は「箕輪林道」となる。樹木の大半は杉と松、その合間をぬって道の路面は、一部を除き砂利道である。曲がりくねった急傾斜の峠道を登りきると、一段低い峠となり、林道はここで終点となる。この地点は、駅から四・一kmあり、山の九合目位に位置し、ここから先は昔からの山道となり、左へコースをとる。三・四分で明るく開けた山の斜面に出た。ここはテレビ電波の受信用中継所で数本のアンテナが立ち並び、南側は眺望がすばらしい。十一時五〇分、ここで昼食を摂る。

この山の斜面を超え、間もなくすると道は、二〜三年位前に重機によつて造られた幅員約一・八㊦の作業道となり、山間で広く平坦な屋敷跡を思わせる広場に出る。ここには作業道が五差路に交差し、行く先はどちらか、ふと迷った。そこで、南側に面した路線の方向を選び道を進む。このあたりは字下津原字金山沢の奥にあたり、杉や松の大木が立ち並び、あたりは閑寂そのもの。さらに進むと、大子森林管理所が所管する林道と交差するところで作業道は終わる。ここからは、南側は大字頃藤の仏沢と大字下津原の金山沢の境界にあたる尾根の山道を東に向かつて進む。途中松喰虫に犯された松の倒木が山道を遮っている。やがて道は、下津原字ひ五郎沢の奥に差しかかる。ここで小休止する。ここからはこの沢を下る。沢の道は荒れ果てて、道のない状態が長く続き、沢口に着くまでは苦労した。それでも午後二時五分袋田駅に到着した。近年上箕輪までは、観光散策コースに紹介されているので、観光客の爲に散策標示路杭の必要を感じた。

## 昭和の初め頃の農家の行事 一 お正月

その頃の農家の行事は旧暦が基準だったから、新暦とはやや季節が離れてくる。

お正月も新暦では二月末の頃になる事が多い。だから三学期が始まってからお正月になる。農家ではそれまでの間にお正月を迎えるために、冬の仕事を急いで終わらせようと努力する。そして楽しいお正月がやってくる。お正月はなんと言つても新しい着物や下駄などを買ってもらえる上に、普段は食べないご馳走が期待できたから、一番の楽しみだった。

一、餅つき お正月の四、五日前になると何処でも餅つきをする。朝早くから竈を焚きつけ、普通の白い餅や栗餅、粉餅、たがね餅など色々な種類や形の餅ができる。一蒸籠は四升が普通で、これが一臼になる。まだ米が豊富にあった頃は一〇臼から一五臼くらい搗いたから搗くのもたいへん、搗いた餅をおしきでのしたり、あんころ餅にしたり、餡を入れた大福餅にしたりする。すっかり終わる頃は夕方になってしまふ。これがお正月のご馳走になる。おしき餅はだいたい一升が一枚で、それを十六枚に断つから、餅一切れは米で約六勺になる。これを囲炉裏で焼いて醤油をつけて食べるのが一般的だった。餅の焦げたのと醤油の香りが何とも言えない。海苔を絡んで食べるというようなのは、その当時はやや贅沢と思っていた。

醤油をつけたらもう一度焼くと言うように何度か繰り返えずと、餅が柔らかくなり味もよく滲みこんでおいしくなる。これを「ひき焼き」と言つて弁当に持つていっても堅くならない。

二、若水 元日の朝は早く起きる。特に男は早くおきて「若水」を汲む仕事がある。子供の頃は二時頃起き出して菓缶か

手桶を持つて井戸まで水をくみに行った。まだ暗いが、大抵は雪があつて、雪明かりで結構見える。まず井戸神様に米を振りまいて上げ、水を汲む。それだけのことだが、ひどく新鮮な気がする。

普通は炬燵にしておく上の囲炉裏を、お正月の間は鍵つるしを下げ、そこで豆がらを燃して炭をあかあかと起こし、若水でお湯を沸かす。それでお茶を入れ神棚に供える。神棚には松飾りやしめ縄、お供え餅みかんなどが上がっている。

三、お宮参り 初原の鎮守様は辰の口にある鹿島神社だから、二キロ位ある。雪が降つて寒い中を結構何人かの参詣人がある。お賽銭代わりに米を紙に包んで上げてあるものもある。子ども達は何も上げないで「勉強ができますように」などと虫のいいことをお願いする。帰つてくると母や姉たちが餅を焼いたり、お雑煮を作つたりして待つていてくれた。腹が減っているから特にうまい。焦げた餅が減多に作らない醤油汁の中で柔らかくなっている。あの味と香りは格別で、正に何にも勝る正月の味だ。

四、遊び 正月の遊びは凧揚げやカルタ、双六などで、女の子は羽根突きが多かった。凧は自分でつくつたもので、あまり揚がらなかつた。家に「百人一首」があつて、それを時々出して遊ぼうとしたが、書いてある文字が変体仮名でちんぷんかんぷん、適当に読んでいると親たちはそれは違ふと言つて教えてくれる。殆どの歌を暗記している上に、面白い替え歌なども知つていて、若い頃ずいぶんやつたなと思つた。雪が降つたりあまり寒いときは、家の中でカルタや双六をやるが、すぐに飽きてしまつて外へ飛び出す。そり滑りや雪だるま作りの方が面白かつた。

(石井)

## 月居峠の供養塔

月居山は、標高四〇三メートルの山である。北嶺と南嶺からなり、その間は鞍部と呼ばれ、東の太平洋岸と西の内陸部を結ぶ道筋の峠であった。この峠道は「東浜魚荷の道」と呼ばれ、東の海岸地方から保内地方や野州地方へ、西の内陸部に塩やかつおなどの海産物が運ばれてくる生活道であった。

北嶺寄りの道筋に猫の額ほどの平らな土地がある。真言宗月居山光明寺があつたところである。寺は元治甲子の乱で焼失したが、本尊（聖観音菩薩）は龍泰院に運ばれて難を逃れた。



供養塔（昭和18年建立）

山門を入ると、正面に供養塔をはじめ、右側に宝塔、左側に五輪塔、その背後に聖観音菩薩塔、地蔵菩薩塔、如意輪観音塔等の立派な石仏、石塔が並んでいる。大子周辺地域には見られない立派な石仏・石塔群である。私も初めて訪れた時は、「どうしてこの地にこんな立派な石仏・石塔群があるんだらうか。月居山光明寺のものだらうか、それとも山麓にあつた万福寺のものだらうか」という疑問を

もった。それらの疑問は「供養塔記」が解決してくれる。

供養塔をよく見ると、碑表の中央に「供養塔」、中央左側に「蘇峰正教」の記銘と刻印があり、徳富蘇峰（名は猪一郎）の揮毫によるものである。碑の裏面には「供養塔記」があり、供養塔を建立したいわれや望月茂の「吊いの詩」が刻まれている。その一部を紹介しよう。

### 供養塔記

郷塔ノ先輩竹内勇之助名湯袋田温泉ヲ開創スルト共二古刹月居山光明寺ノ再興ヲ発願シ、新夕ニ聖観音の御堂ヲ建立セラル。依ツテ万靈回向の為宿願菟ムル所ノ仏像五十余体ヲ奉安シ、碑陽ニ恩師徳富猪一郎翁ノ墨寶、碑陰ニ望月茂ノ弔詩ヲ識シ、併セテ亡児美代女ヲ追年スト云爾（以下略）。

昭和十八年十一月

水戸史談会 山野辺義智誌

碑文によると、竹内勇之助は昭和十一年に袋田温泉ホテルが営業を開始したのを機会に、月居峠の「天狗・諸生の戦い」で焼失した月居山光明寺観音堂の再興を企画し、昭和十七年新たに観音堂を建設した。また、観音堂再建にあたって、以前から蒐集していた仏像五十余体が奉安されたことが記されている。供養塔背後の石仏・石塔群は、竹内勇之助が観音堂の再興に備えて、死者の霊や亡児女美代の供養をするために石仏を蒐集していることを知り、親交のあつた山野辺義智が昭和十六年十二月に石仏・石塔四十五体を寄進したものである。供養塔は昭和十八年に建立された。

山野辺義智は、明治二十二年水戸市松本町生まれ。助川海防城主（日立）山野辺義観の末裔である。中央大学経済学部卒業後徳富蘇峰の民友社の同人として師事した。また、田中光頭の知遇を得て明治記念館の設立にあつた。昭和九年には水戸史談会を設立した。文章家としても知られ、多くの碑文を書いている。

（小澤）

## 新聞記事にみる満州移民の断片(八)

— 第九次冷家店大子町開拓団の軌跡 —

昭和十五年一月に渡満した大子町開拓団の初期の生活の一端については、同年九月四日付「いはらき」新聞に掲載された「開拓団便り」からすでに紹介した(本誌第五六号参照)。建設が進み、次第に「分村」としての形が整ってくる様子を、さらにいくつかの記事でみておこう。

渡満から約一年後の昭和十六年一月、開拓団長の菊池正修から近況を伝える通信がいはらき新聞大子支局へ寄せられたとして掲載されたのが、次の記事である(十六年一月十二日付夕刊)。

「一、建築状況 計画実行棟数六十三棟中完成せるもの共同宿舍四棟、浴室、井戸、貯蔵庫、便所各二棟、個人家屋八棟(十六戸分)は造作中、二、営農状況 水稲十町歩外計六十八町歩耕作予定の処実成に口五十九町歩たり水稲は播種遅れたるも鴨の被害で失敗の外霜害のため高粱、そばは五割、野菜は三割の被害を蒙りたるは誠に遺憾とする所なり、小麦、大豆、馬鈴薯は普通作以上たり、三、資金関係状況 円滑を欠くる場合があるも概して有効に融通されるを以て現在不安なし、四、保健衛生状況 感冒予防注射第二回終了、食事方面も栄養に注意せる結果現在百〇八名中神経痛と見るべきもの二、三の外一人の患者もなし、五、訓練状況 班制を組織し学科、武科の教練、自警備に訓練しつゝあり、六、原住民と口口状況 冠婚葬祭に心情を密にし殊に患者に対し施療をなし且子供を通じ協和誘導に努む、七、開拓団法 団法の運営について常に法の徹底化を図り監督官庁との密接なる連絡をとり団規を設定し団長は實際の核心となり団員の鞏固なる精神団結を以て団法の円滑なる運営を期しつゝあり、八、自体防備に付て警戒心の養成、戸締り、

消灯、立哨、巡察等嚴重に励行、番犬の使用と共に城壁の完備をなす軍、警と連絡、情報の蒐集に努め現住民との協和を完ならしむ」。

また、その半年後の昭和十六年七月には、菅井特派員発として「大子開拓団の概況」が伝えられた(十六年七月三日付夕刊)。大子開拓団の動静を把握できる文書資料が極めて限られているなか、当該記事からは「分村」の形がある程度みえてくるため、長くなるが引用しておきたい。「大子開拓団の概況 見よ高き聖歟の陣 日天祖の皇謨を奉ず」と題した記事は、次のように伝える。

大子開拓団のことは県民の耳に幾多の印象を与へてゐる。この開拓団の公式名称は「第九次冷家店大子町開拓団」である。

本団は昨年二月十一日紀元節の佳き日に先遣隊十六名が入植し爾後数回に亘り入植、現在団員五十名家族六名、幹部職員その他廿名合計百六十六名の集団である。

位置 は北安縣齊北線泰安駅の南方十四キロ、依安縣の北方四十キロの地点即ち北安省依安縣北部百川村に所在す。

地区概況 北方烏拉爾河を距て、克山縣に接し東西十八キロ、南北九キロの梯形をなし地勢は若干の起伏あるも殆ど平坦にして総面積一万町歩、内既耕地千七百町歩、未耕地三千四百町歩、原野三千六百町歩、湿地千三百町歩である。

飲料水 井戸の深さ四米内外にして水量多く水質良好である。交通 齊北線泰安駅より口へ十四キロ、鉄道バスの運行あり(但し現在昨年の水害で道路一部決潰バス運行一時中止なるも間もなく開通)泰安駅より八キロにして伝礼屯に下車路面七米の開拓道路を行くこと六キロにして開拓団仮本部(近く本部新築)に到着す、尚道路一部破損中は団に常口するトラックを運行連絡しつゝあり。

(齋藤)



【資料紹介】「開基帳」にみる町内の天台宗・一向宗

寛文三年(一六六三)、第二代水戸藩主徳川光圀は、領内にある社寺の実態を把握するため各村の庄屋(名主)に対して社寺の実態を調査することを命じた。藩はこれをもとに領内の社寺を一覧できる「開基帳」を作成した。

その記載内容は、山号・寺号、その石高、除地(年貢免除地)証文の有無、百姓地(年貢賦課地)、本寺、開基(開山)者とその年代、開基から寛文三年までの年数、旦那(檀家)数などである。前回に引き続き、「開基帳」の中から、天台宗・一向宗(浄土真宗)について、江戸初期、町内の寺院の様子を紹介しよう。天台宗

- ・上金沢村 玄常院 元俗 (佐良土村法輪寺末寺)
- 寺門 一斗六升百姓地 天正五年より八七年 旦那二五人
- ・相川村 円輪坊 破却 (天台宗佐良土村法輪寺門徒)
- 高 一斗三升六合権現免 慶長七年寅御縄之時分、嶋田次兵衛見捨にて証文ござなく候 開基は知り申さず候
- ・埴村 泉蔵院 元俗 (那須佐良土村法輪寺末寺)
- 寺門 百姓地 天正三年立ち申し候より七九年
- ・高岡村 東膳院 追放 (那須佐良土村法輪寺末寺)
- 高六斗六升除地 慶長三年より六六年 百姓旦那一三人
- ・池田村 宝蔵院 元俗 (佐良土村法輪寺門徒)
- 寺門 百姓地 永禄二年に立ち申し候より一〇四年
- 高 一石二斗三升七合薬師免 同寺仕配
- ・浅川村 稲荷山 安楽院 常興寺(那須佐良土村法輪寺末寺)
- 高 六斗除地 天文六年より一七七年 百姓旦那八七人
- ・大子村 不捨山 花光院 浄光寺(佐良土村法輪寺末寺)
- 高 五斗八升三合除地 永正元年より一六〇年 旦那八七人

- ・下金沢村 小平山 自在院 慶福寺(佐良土村法輪寺末寺)
- 高 二石五斗八升除地 永正三年より一五八年 旦那五二人
- ・下金沢村 円寿院 平僧 (佐良土村法輪寺末寺)
- 高 四斗除地 文禄二年より七一年 百姓旦那三七人
- 一向宗(浄土真宗)
- ・小生瀬村 浄専坊 願清寺に成る(久米村願入寺末寺)

- 高 二石四斗七升一合 天文二年より一三二年 旦那四七人
- なお、久米村(旧金砂郷町)願入寺について、開基は本願寺二代如信上人、奥州に下向して弘安九年(一一八六)に白河郡大網郷に一字を結び「奥之坊」と号したという。その後、文禄三年(一五九四)に久米村に移る。寛文三年には末寺二三か寺、旦那一一〇〇人である。延宝二年(一六七四)に岩船(大洗町)へ移った。

- ・初原村 正円寺
- 寺門百姓地 明応七年より一六六年 百姓旦那三二人
- ・上沢村 正念寺 (額田村阿弥陀寺末寺)
- 高 四斗四升除地 元亀元年より九四年 旦那三九人

天台宗のお寺は、大子町内に九か寺あり、那須郡佐良土村(湯津上村)法輪寺の末寺である。第二代水戸藩主光圀の社寺整理により、町内では、高岡村(上岡村、古くは上沢村と一村であったという)東膳院・埴村泉蔵院・上金沢村玄常院・相川村円輪坊・池田村宝蔵院の五か寺が還俗(僧侶が俗人にもどる)や破却させられている。

一向宗(浄土真宗)のお寺は、寛文三年、水戸領内に六八か寺、大子町内には三か寺あったが、社寺整理はなかった。

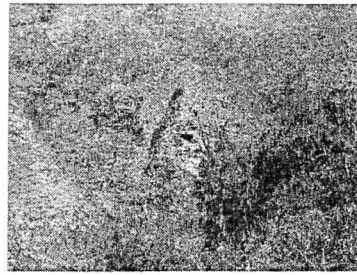
なお、臨済宗、浄土宗、日蓮宗の寺院は、当時、町内に存在しなかった。次の機会には真言宗について紹介したい。(野内)

## 大子町文化財の被害状況について

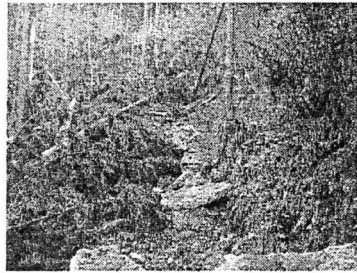
三月十一日に発生した東日本大震災で被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

今回の大震災では、多くの建物が倒壊し、文化財も大きな被害を受けました。大子町においても同様であり、その被害状況を報告します。

①茨城県指定文化財 名勝 「袋田瀧」  
(所在地：袋田 管理者：大子町)



天狗岩の南側が崩落

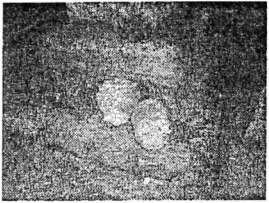


ハイキングコースが多  
くの倒木や崩れ、落石によ  
り壊滅的状态

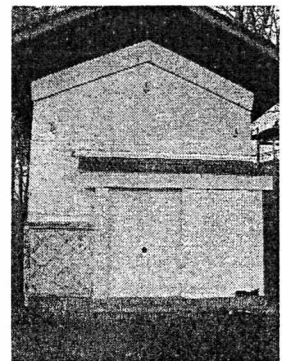
②大子町指定文化財 建造物 「大雲寺観音堂附属宝篋印塔」  
(所在地：中郷一二七四 管理者：宗教法人大雲寺)



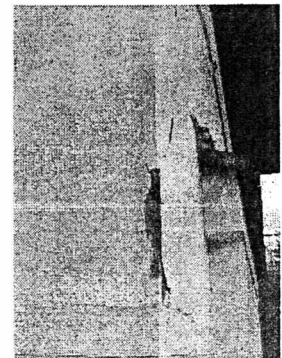
宝篋印塔（ほうき  
ょういんとう）の  
相輪（最上部の棒  
状の部分）が破断



③大子町指定文化財 史跡 「文武館文庫」  
(所在地：大子五五八ほか 管理者：大子町立だいご小学校)



外壁の漆喰がヒビ  
割れ、剥離



その他の文化財については、幸いにも大きな被害を免れました。今後、被災した個人宅にある未指定文化財の散逸が心配されます。震災で壊れた家屋や倉庫を整理する際、古文書、古美術品などを処分しないように、注意を喚起してまいります。

(皆川)

※本誌五十八号の五ページ上段に「名前が不詳の劇場と大子クラブである」とあるのは「O劇場とDクラブである」と訂正します。

編集人 斎藤 典生 (茨城大学人文学部)

野内 正美 (元 教員)

石井喜志夫 (元 教員)

小澤 罔彦 (元 教員)

皆川 敦史 (大子町教育委員会)

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 ☎0295(72)2627